

Representations of non-regular semi-direct
product groups

阪大 基礎工 河上 哲

非正型群においては、(A)既約表現を決定するのが困難である事、及び(B)表現の既約分解が一意的でなくなる事、が一般に知られている。そこで(A)非正型群の既約表現のうち、Mackey の方法によれば具体的に求まらない表現の構造を明らかにする事、及び(B)分解の一意性の破れる原因を索る事、の2点を目標にしたい。(A)に関しては、講究録368([4])で述べたので、ここでは主に(B)に関して記述する。

序

H. Yoshizawa と G.W. Mackey が、独立に、ある離散群(2元生成の自由群, $\mathbb{Q} \times_s \mathbb{Q}^*$)において、その正則表現が2通りに分解出来る事を示したのに始まり、A.A. Kirillov は、ある单連結なリーベ群(Mauthner群)においても、同様の現象が生ずる事を示している。一方、M. Saito は、 $SL(2, \mathbb{Z})$ において正

$$R: G \rightarrow C^*(G) \text{ (regular)}$$

$$C^*(G) \supset R(G)' = \text{Center } C^*(G)$$

72

↑ 極大可換 von Neumann 環

Rのキヤウド

則表現の無限個の異なる分解を与えていく。ここでは、ある

半直積群の典型的な hyperfinite な II型因子表現の色々な分解を具体的に与えてみる。

F.I. Mautner によると、群 G の表現 π に対し、 π の既約分解と $\pi(G)'$ の中の極大可換 von Neumann 環が対応している事が知られていく。他方、群の非 I 型性は、位相変換群の "non-smooth"

と密接に関係しており、我々は [1] において、"non-smoothness"

の 1 つの指標として、ある種のコホモロジー群を採用した。

ここでは、そのコホモロジー群の各元に対応して、全く異なる既約分解が得られる事を示すと同時に、それぞれの分解に対応する極大可換 von Neumann 環を明示する。今迄の知られていく例では、異なる分解に対応する可換 von Neumann 環は、互いに代数的に同型でない環だが、ここでこの環達は、あくまで互いに spatially に（勿論代数的にも）同型である点が異なると思われる。

non I type \leftrightarrow non smooth

\downarrow
ある cohomology

準備

$\pi(G)$ の中の
極大可換 von Neumann 環

\leftrightarrow 13.3 条 既約分解

N, K は、可算基を持つ局所コンパクト群で可換であると仮定する。（ K が N に自己同型群として作用しており、その作用を、 $K \ni k$ に対し、 $N \ni z \mapsto k \cdot z \in N$ と記す。 $G = N \times_s K$ (N と K の半直積群) で、 G の元は (z, k) ($z \in N, k \in K$) と書か

$\begin{matrix} z \\ N \end{matrix} \quad \begin{matrix} k \\ K \end{matrix}$

$$k \cdot z = \left(\begin{pmatrix} k_1 \\ k_2 \end{pmatrix} \right) \left(\begin{pmatrix} n_1 \\ n_2 \end{pmatrix} \right) = \left(\begin{pmatrix} k_1 n_1 + k_2 n_2 \\ k_2 n_1 + k_1 n_2 \end{pmatrix} \right)$$

$$\begin{aligned} k \cdot \chi^{(\sigma_1, \sigma_2)} &= \chi^{(\sigma_1 + k\sigma_2, \sigma_2)} \\ &= \chi^{(\sigma_1, \sigma_2)} \left(\begin{pmatrix} 1 \\ k \end{pmatrix} \right) \end{aligned}$$

れ、群演算は、

$$(z, k)(z', k') = (z + k \cdot z', k + k') = (0, 0)$$

で与えられているとす。

$$k \cdot z' = -z \Rightarrow z = (-k) \cdot (-z) = k \cdot z$$

この時、 K の \hat{N} (N の双対)への作用を、 $k \in K$, $(x \in \hat{N})$

に対して、

$$\chi^{\sigma_1, \sigma_2} \left(\begin{pmatrix} n_1 \\ n_2 \end{pmatrix} \right) = e^{(\sigma_1 n_1 + \sigma_2 n_2)}$$

$$\langle z, k \cdot x \rangle \equiv \langle k \cdot z, x \rangle$$

$$\left\langle \left(\begin{pmatrix} k_1 \\ k_2 \end{pmatrix} \right) \left(\begin{pmatrix} n_1 \\ n_2 \end{pmatrix} \right), \chi \right\rangle = e^{(\sigma_1(n_1) + \sigma_2(k_1 n_1 + k_2 n_2))}$$

$$\text{for } \forall z \in N = e^{((\sigma_1 + k_1 \sigma_2)n_1 + \sigma_2 n_2)}$$

で定義すると、位相変換群($K; \hat{N}$)を得る。 $(K; \hat{N})$ が

"smooth" な時、つまり K の作用による \hat{N} 上の各軌道がすべて

局所開集合である時、 $G = N \times_S K$ は "regular" であると云われる

。 N, K 伴に可換である今の状況の下では、 G が "regular"

である事と、 G が工型の群である事とが同値になる。

我々は、主に "non-regular" な半直積群 (= 非工型群) を扱う

が、次の仮定(*)を必要とする。 "regular" の場合は、この仮

定(*)は、自動的に不要になる。

$$K \subset \mathcal{X}$$

$$G = N \times_S K$$

$$G \cap N \times K$$

Regularity

仮定 (*) K を半部分群として含む大きな可換群 \mathcal{X} が、次の条件を

満たすようにうまくとれる。 \mathcal{X} も N に自己同型群として作

用し、その作用は K の拡大になっている。更に $G = N \times_S \mathcal{X}$

は "regular" な半直積群となる。

離散 Mautner 群、Mautner 群、離散 Heisenberg 群等は、この
仮定を満たす。

$$\mathbb{Z} \oplus (\mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z}) \times \mathbb{Z}$$

本当の離散 Heisenberg 群

3

$(\mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z}) \times \mathbb{Z}$ は (*) 満たさない。

$\mathbb{T}' \oplus \mathbb{R}$

$\mathbb{Z} \oplus \mathbb{R} \subset (\mathbb{Z} \oplus \mathbb{R}) \times \mathbb{Z} \subset (\mathbb{Z} \oplus \mathbb{R}) \times \mathbb{R}$

\mathbb{Z}

$\mathbb{N} \ni \varphi \mapsto$

$N \subset N \times K = G \subset N \times \mathbb{R} = \mathbb{X}$

\mathbb{T}'

$\text{Ind } \varphi$

$N \times G \cong K$

本論

\mathbb{T}^2

今、 φ を N の階乗な1次表現とした時、 $\mathcal{H}^\varphi = \{ f: G \rightarrow \mathbb{C} \mid f(n\varphi) = \varphi(n) f \}$

$\mathcal{U}(L^2(\mathbb{X}/N \cong \mathbb{X}))$

$\pi^\varphi = \begin{matrix} G \\ \downarrow \text{Ind } \varphi \\ N \times G \end{matrix} : G \rightarrow \mathcal{U}(\mathcal{H}^\varphi)$

によって、 G のユニタリー表現 π^φ が得られる。我々は、こ

の π^φ の色々な分解を実行する。 π^φ は、表現空間 $L^2(\mathbb{X})$ に、
次のように実現出来る。 $\mathcal{H}_\varphi = \langle \phi: g \rightarrow \mathbb{C}, \phi(g, z) = \varphi(z) \phi(g) \mid z \in N, g \in G \rangle$
 $\phi(z, t) = \phi((0, t)^{-1} (z, 0))$
 $= \varphi(tz) \phi((0, -t))$

補題 1

$f(t) = \phi(0, t)$

$$\begin{aligned} L^2(\mathbb{X}) \ni f(t) \text{ に対し} & (\pi_{(z, k)}^\varphi f)(t) = f((z, k)(0, t)) \\ & = f(z, k+t) \end{aligned}$$

$$(\pi_{(z, k)}^\varphi f)(t) = \langle z, t \cdot \varphi \rangle f(t+k)$$

$$(\pi_{[t_u^l], k}^\varphi f)(t) = \langle [t_u^l], t \cdot \varphi \rangle f(t+k)$$

$$\text{但し } (z, k) \in G = N \times K \quad \langle [t_u^l], t \cdot \varphi \rangle = \langle (t_u^l) \bar{[t_u^l]}, \varphi \rangle + (t+k)$$

φ における \mathbb{X} の固定群を H_φ と記す。 \mathbb{X} 上の \mathbb{T} -値ボレル

関数 $a(t)$ が、次の条件を満足する時、 $(K; \mathbb{X}; H_\varphi)$ のコサイクルと呼ぶ。但し \mathbb{T} はトーラス。 $H_\varphi \cap K \subset \mathbb{X} \cap H_\varphi$

$$(*) a(k+t+h) = a(k+\underline{t}) \overline{a(\underline{t})} a(\underline{t}+\underline{h})$$

for $\forall k \in K, \forall t \in \mathbb{X}, \forall h \in H_\varphi$

$\mathbb{Z}^*(K; \mathbb{X}; H_\varphi)$

このコサイクル a に対し \mathcal{H}_φ のユニタリー表現 λ^a が

$$(\lambda_h^a f)(t) = \overline{a(t)} a(t+h) f(t+h)$$

$h \in H_\varphi, f \in L^2(\mathbb{X})$

$\mathbb{Z}(K, \mathbb{X}, H_\varphi)$

a

で定め、 $\lambda^a(H_\varphi)$ で生成する可換 von Neumann 環を $\mathcal{O}^{a, \varphi}$ と記す。



この時、

補題2

$$\text{復}(L^2(\Omega)) = \text{復}(\mathcal{H}^4)$$

∨

任意のコサイクル α に対し、 $\pi(G)' \supset \alpha_{\mathcal{H}^4}$

を得る。表現の分解に関する次の一般論は、よく知られてる
3.

補題3 (F. I. Mautner)

$$U(\mathcal{H}) \subset \text{復}(\mathcal{H})$$

可算基を持つ局所コンパクト群 G の可分ヒルベルト空間

へのユニタリー表現を π とする。今 $\pi(G)'$ の中の可換

von Neumann 環 \mathcal{O} が与えられた時、この \mathcal{O} に対応

2. $\mathcal{O} \stackrel{\text{代数的}}{\cong} L^\infty(\Omega, \mu)$ となる "standard" な測度空間 (Ω, μ)

が存在して、 π は

$$\pi = \int_{\Omega}^{\oplus} \pi^{\omega} d\mu(\omega)$$

と分解される。//

$$G \xrightarrow{\pi} U(\mathcal{H})$$

$$\mathcal{O} \subset \pi(G)' \subset \text{復}(\mathcal{H})$$

\mathcal{O} は可換 von Neumann

$$\exists (\Omega, \mu) \text{ s.t. } \mathcal{O} \cong L^\infty(\Omega, \mu)$$

$$\pi = \int_{\Omega}^{\oplus} \pi^{\omega} d\mu(\omega)$$

一方、我々は、 $G = N \times_s K$ の既約表現に関する、いきなり

の考察がすでにある。([1] 参照 - [4] 参照) $G_\varphi = N \times_s H_\varphi \subset G$

とし、 $x \in \hat{H}_\varphi$ に対し、 $\langle \varphi, x \rangle \in N \times_s H_\varphi$ $\langle x, \varphi \rangle = \varphi * x \in \varphi \circ \hat{H}_\varphi$

$$(\varphi * x)(z, h) := \langle \varphi, z \rangle \langle h, x \rangle \quad (z, h) \in G_\varphi$$

で定まる G_φ の一次表現とする。 $(K, \chi; H_\varphi)$ の各コサイ

クル α に対応して、[1] において、Mackey の誘導表現の一

般化として、

$$(\varphi * x)((z, h)(z', h'))$$

$$= (\varphi * x)(z + h \cdot z', h + h')$$

$$= \langle \varphi, z + h \cdot z' \rangle \langle x, h + h' \rangle$$

$$= \langle \varphi, z \rangle \langle \varphi, h \cdot z' \rangle \langle x, h \rangle \langle x, h' \rangle$$

$$\langle \varphi, z' \rangle \langle h \circ H_\varphi \rangle$$

$$\begin{aligned}
 & N \curvearrowright \varphi \implies \pi^{\varphi}: G \rightarrow \mathcal{V}(L^2(\mathcal{H})) \\
 & \quad \downarrow \\
 & H_{\varphi} \subset \mathcal{H} \\
 & \quad \downarrow \\
 & \exists (K, \mathcal{H}, H_{\varphi}) \ni a \implies \lambda^a: H_{\varphi} \rightarrow \mathcal{V}(L^2(\mathcal{H})) \implies \partial^a \subset \pi(G)' \\
 & \quad \downarrow \\
 & T(a, \varphi, \chi) = \text{Ind}_{G \rtimes a}^G L(\varphi, \chi) : \\
 & \quad \left\{ \begin{array}{l} \text{① } L^2(\Sigma, \mu) \\ \text{② } L^{\infty}(\Sigma, \mu) \cong \sigma_a \\ \text{③ } \pi^{\varphi} = \bigoplus_{\Sigma} \pi^{(a)} \end{array} \right. \quad \mu \ll \sigma_a
 \end{aligned}$$

と定義した。

そこで我々は、上記の π^4 を π^4 に關して具体的に分解と実行してみると、次の結果を得た。

定理 4

$$\mathcal{O}^{a,\varphi} \cong L^\infty(\widehat{H}_\varphi, \mu)$$

$$L^\infty(\hat{H}_\varphi, \mu) \cong \Omega^a$$

π^q の α^a に関する分解は、

$$\pi^{\varphi} = \int_{\hat{H}_\varphi}^{\oplus} T^{(a, \varphi, x)} d\mu(x) = \int_{x \in \hat{H}_\varphi}^{\oplus} T^{(a, x, \varphi)} d\mu(x)$$

但し、 μ は \hat{H}_p の Haar 測度であり、 $D^{(a,p,\pi)}$ は、上に定義した G のユニタリー表現である。//

二つのコサイクル a, a' に対して、 K -不变なコサイクル b と H_4 -不变なコサイクル c が存在して、

$$a(t) \overline{a'(t)} = b(t) c(t) \quad a, a', t \in \mathbb{X}$$

となっていゝ時、 α と α' はコホモロガスであると云々、 $\alpha \cong \alpha'$ と書く事にある。そこでコホモロジー群を、

$$\mathcal{H}^{\varphi} \equiv \left\{ (K; \mathcal{X}; H_{\varphi}) \text{ のコサイクル全体} \right\} / \tilde{\equiv}$$

$$\mathcal{H}_0^{\varphi} \equiv \hat{\mathcal{X}}/\hat{\simeq} = \hat{\mathcal{X}}/K^\perp + H_{\varphi}^\perp \quad (K^\perp, H_{\varphi}^\perp \text{ は零化群})$$

で定める。 \mathcal{H}_0^{Ψ} は \mathcal{H}^{Ψ} の部分群になつてゐるから、

$$\frac{w}{h} = x^4 / x_0^4$$

を更に定義する。この時、 $\bar{U}^{(a, \varphi, x)}$ に因し。

命題5 ([1])

二つのコサイクル a と a' に対し、 $\widehat{\mathcal{H}}$ の元として、 $[a] + [a']$ ならば、任意の $x, x' \in \widehat{H}_\varphi$ に対し、 $\bar{U}^{(a, \varphi, x)} + \bar{U}^{(a', \varphi, x')}$ は決して、ユニタリー同値にならない。//

つまり、定理4は、 π^φ の $\widehat{\mathcal{H}}$ 通りの全く異なる分解を与えていい。しかし、対応する可換 von Neumann 環 \mathcal{O}^a は、 a が自由に動いても、すべて spatially に同値になつてゐる点に注意しておこう。ここで $\widehat{\mathcal{H}} = \{0\}$ では、“色々な分解”を与えた事にならない。そこで、いつ $\widehat{\mathcal{H}} = \{0\}$ か、いつ π^φ は非工型かを調べておく必要がある。

命題7

π^φ が非工型表現である $\Leftrightarrow K + H_\varphi$ は \mathcal{X} の中で閉集合でない。

命題8 ([1])

$K + H_\varphi$ が \mathcal{X} の中で閉集合の時、 $\mathcal{H}^\varphi = \mathcal{H}_0$ 、即ち $\widehat{\mathcal{H}} = \{0\}$ // 等は、容易に判る。更に、C.C. Moore 氏のコメントによると

命題9 (C.C. Moore)

$K + H_\varphi$ が \mathcal{X} の中で閉集合でない時、 $\widehat{\mathcal{H}}^\varphi \neq \{0\}$ // つまり、 π^φ が非工型表現である時は、“必ず” 2通り以上の分解が存在している。具体的な簡単な幾つかの例において

は、 $\widehat{\mathcal{H}} \cap \{Q = \text{有理数全体}\}$ である事が判っており、([1]参照) $\widehat{\mathcal{H}}$ は①よりはるかに巨大である事も予想されるが、その決定は極めて困難であり、未解決である。

最後に、 $\mathcal{U}^{(a, \varphi, \chi)}$ 及び \mathcal{U}^{\pm} に関しては、次の事が判る。

命題9 ([1])

$K + H_\varphi$ が \mathcal{U} の中で稠密なら、 $\mathcal{U}^{(a, \varphi, \chi)}$ は既約表現。//

命題10

$K + H_\varphi$ が \mathcal{U} の中で稠密で、 $K \cap H_\varphi = \{0\}$ なら、 π^φ は因子表現。更にこの仮定の下で、 $K + H_\varphi \neq \mathcal{U}$ である事と π^φ が hyperfinite な II 型因子表現である事が同値。//

余談

以上は、主に論文 [2] の紹介である。講演後の富山氏のコメントに従って、 C^* -群環の表現として、とらえ直してみると、 $\pi^\varphi(G)'$ の正体及び $(C^*\text{-の極大性等})$ が、より鮮明になった。これらについては [3] を参照されたい。

参考文献

- [1] S. Kawakami ; Irreducible representations of non-regular semi-direct product groups (Preprint)
- [2] _____ ; On decompositions of some factor representations (Preparation)
- [3] S. Kawakami & T. Kajiwara ; Representations of non-type I C^* -crossed products. (Preparation)
- [4] 田上 哲 ; Mautner 群の既約表現について (数解研講究録 368)